

「実物はいちだんと可愛いな」

ふと聞こえてきた穏やかな声で、私は目を覚ましたの。一緒にいた最後の兄弟がいなくなって、ひとりぼっちで心細くて泣いているうちに寝てしまっていたみたい。

「あ」

寝起きでぼんやりしていたら、急に抱きあげられてびっくり。でも、この手のおいしは知ってるわ。兄弟の中で一番身体が小さくて、ごはん争奪戦にも負けてしまう私に、いつもごはんをくれる人よ。

とても優しくて温かくて、たくさん遊んでくれるから大好きなの。それに、なんだかこの人のそばはものすごく安心できるから、いつもこう呼んでいるのよ。

「パパ！」

実は私、本物のパパのことは全然知らないの。でも、たぶんこんな感じだと思うのね。

おっと。抱っこされた胸元から落ちないように爪を出して掴まらなくちゃ。ここからパパの肩によじ登れば、ちょっとは楽な体勢になれるの。

「こら。俺じゃなくてこっちだ」

「ちょっと、パパ！？」

「うわ。ちっちゃくてふわふわ」

首の後ろを持たれてパパから離されて慌てちゃったけど、すぐにまた抱っこされてホッとしたわ。でも、パパじゃない人だから不安でべそをかいたら、しっとりした声があやすように囁いたの。

「どうした？ 大丈夫だよ。もう寂しくない。今日からおまえはうちの子だ。おれと一緒に住もうな。仲良くしよう」

「え？」

どういう意味かしらときよととなった私に代わってパパが言った。

「まさか、<sup>あやと</sup>礼人がこいつをもらってくれるとは意外だったな」

「子猫の里親募集の話聞いて気になってはいたんだよね。元々猫好きだし。で、写真見たらもうだめ。一撃で即決」

「なんにしろ、おまえなら心配無用だ。無条件で俺は安心できる」

「……まあ。うん。任せて」

このとき、私を抱っこしてる人の胸がなぜかすごくドキドキし始めたの。不思議に思ってみ上げると、微かに潤んだ薄茶色の瞳と視線が合ったわ。その瞬間、なんとなく、この人もパパのことが好きなのかなって直感して、私、仲良くなれそうだって思ったのよ。

「そういえばさ、おれ、実はもう名前考えてきたんだよ。たしかオスっていったから、どうせなら“青木”とか“カズマ”ってつけてやろうかなってさ」

「……ああ。それが、オスは昨日もらわれていったな。こいつはメスなんだ」

「そ…っか」

いちだんとドキドキしてる目の前の胸がなんだか大変そうで、片手で撫でてあげる。そんな私の頭をつついて、パパがまじめな声で要望してくれた。

「できれば、可愛い名前を頼む」

「可愛いって…」

「“礼人”みたいな、響きが可愛い感じで」

「……っ」

ドキドキが乱れ打ち状態になって、私を抱く手に力がこもって驚いたけど、ほどなく穏やかな声音が耳元でしたの。

「じゃあ、“みるく”にする」

「白い毛だからか？」

「誰かさんが牛乳好きだから」

「いつの話だ」

「可愛い名前なんだからいいだろ」

「たしかに。…よかったな、みるく」

甘く優しい手つきで私の顎の下を撫でるパパが、私を抱っこする人の髪も撫でて笑って、『一真！』って怒られてた。

こうして、私は礼人にもらわれていったの。パパも遊びにきてくれるっていうし、これからの生活が楽しみだわ。